



100周年



株式会社文化時報社 発行所・〒600-8243 京都府下京区染井通り堀小路下ル 電話(075)371-0159 FAX(075)371-5803 info@bunkajihoh.co.jp 購読料(送料別) 1部300円 1カ月2,450円(半年または1年別)

1部300円 1カ月2,450円(半年または1年別)

TOPICS スペインと同日巡礼——3 大谷派宗議会質問戦——4 不登校児の親子写真展——6 「青葉まつり」で結願——6

きょうの標語 人は成功に向かってつまづく。 実業家、メアリー・ケイ・アッシュ (1918~2001)

文化時報は、人生の道しるべとして、時代の半歩先を読む宗教専門紙です。 文化時報は、健全な経営を行い、この時代のふさわしい良質な紙面を作ります。 文化時報は、従業者一人一人が高い専門性と広い視野を持ち、宗教界の発展に貢献します。

臨床美術で気分転換

坊守、福祉関係者らに講習

臨床美術師 用語解説 II の講座を聞き、福祉関係者のストレス解消に貢献している。臨床美術士の資格を持ち、僧侶でもある佐々木さんは「仏教には社会を見つめる目が必要」と話し、「福祉仏教」の視点から伴走型支援に取り組んでいる。

場は一気に活気づく。佐々木さんが月1回、土曜日に開催している臨床美術師講座だ。参加者は障害者・高齢者施設の職員や作業療法士など、福祉関係の仕事に携

わっている人が多い。この日は、バナナの繊細な色合いや皮の触感を感じながら、色画用紙にバナナを描いた。介護職の男性(40)は「疲れたとき、気分転換や脳の活性化に役立つ」。作業療法士の女性(57)は「アイデアが湧き、ストレスが解消してスッキリする」。異口同音に効果があると話した。

脳の活性化に期待

ウズン2階ギャラリーを、40~60代の男女8人が訪れた。

京都市地下鉄四条駅か側、の門前通りにある大善院に併設されたコミュニティの屋下がらに、佛光寺東テラススペース「おてらハウス」で臨床美術講座に参加者にアドバイスする佐々木美世子さん(左手前から3人目)



臨床美術講座に参加者にアドバイスする佐々木美世子さん(左手前から3人目)

新しいお寺像追求

佐々木さんは真宗大谷派の寺院の長女に生まれ、跡を継ぐよう言われて育った。既定路線に反発し、愛知県の福祉系大学に進学。卒業後は養護学校の非常勤講師を経て、高校の社会科教師として23年間教壇に立った。

「門信徒だけではなく、お寺と縁のない方々にも足を運んでもらい、幅広く人とのつながりを持てる場を作りたい。開かれたお寺を目指す正祥さんは2005(平成17)年、駐車場だった隣接地に「おてらハウス」を建設。蔵風の吹き抜ける階建てで、1階はカフェ、2階にギャラリーを設けた。



④大善院に併設された「おてらハウス」 ⑤「人に寄り添い、気持ちを受け入れることが大切」と語る佐々木さん



福祉仏教入門講座で開眼 佐々木さんは10年に臨床美術士の資格を取得した。障害者支援施設の職員として働いていたこともあり、「アート」福祉、仏教のつながりを深め、お寺として貢献する方を募集。14

何かできることをアピールしたい」と意識したからだ。施設の中で臨床美術講座を開く一方、お寺が社会にアプローチし、僧侶が社会人として、新たな坊守像を実践していく。

開創大法要円成



日蓮宗大本山身延山久遠寺(内野) 日蓮は主、山形県身延町)で生まれ、身延山西開創750年慶讃八法要は18日、7日間の日程を終えて円成

用語解説

▼臨床美術 芸術療法(アートセラピー)の一つ。絵やオブジェなどの作品を通して、自分自身や周囲の環境を活性化させる。高齢者の介護予防や認知症の予防・症状改善、働く人のストレス緩和、子どもの感情教育などに効果が期待できるとされる。

年から「おてらハウス」の2階ギャラリーを会場に使うようになった。

そつした中、「葬式仏教から福祉仏教へ」をキャッチフレーズに、社会活動に取り組み僧侶のために開講した「文化時報 福祉仏教入門講座」第一期(12月)を受講。自身の方向性が定まった。大善院の空きスペースを住民に提供し、どんな人にも寄り添う伴走型支援を実現しようと考えた。

「人に寄り添い、気持ちを受け入れる」とは、仏教者の大切な視点。そうではないけれど教えるは伝わらない。境内で参加者が「ミニミニ」を深めながら非日常を体験し、リフレクシオンをする。そんなお寺の在り方が理想だと考えている。おてらハウスの「支配人」として、新たな坊守像を実践していく。